

第25回復興支援活動

体験記



熊本県益城町

2016. 8. 8

第25回復興支援活動 in 熊本県益城町 タイムテーブル

8月7日(日)

15:30 新山口駅 集合・出発(第11回鍵山教師塾終了後)

18:00 九州自動車道 広川PA 休憩・夕食

20:00 熊本市内宿泊先到着

8月8日(月)

7:30 益城町ボランティアセンター到着

9:00 支援活動場所到着・支援活動開始(益城町内)

14:30 埜口先生に益城町を歩いて案内していただく。

15:30 益城町総合体育館出発→熊本駅・熊本空港・博多駅・福岡空港にて各地解散

第二十五回復興支援活動体験記

★宮城県 五十代 女性★

『あかるく、げんきに、ありがとう』

被災地を訪れるという「覚悟」「準備」「思い」

それらを実際に経験し、東日本大震災で私が受けた支援に対する感謝が深まった。

正直な気持ちを言えば、怖かった。自分の目に映る光景をどう思うのだろう。つぶれた家、崩れた壁・・・でも、それを口にするには言い訳ではない。過去を振り返りあれこれ思うのではなく、今現実には厳しい状況にある熊本の皆さんを思えば、ただただ目の前の「片付け作業」に一生懸命取り組むだけ。つらい「今」が少しでも早く「過去」になるように。消すことのできない思いを、少しでも小さく、弱くする事。

手付かずの家が多い。壊れた家を解体するまで、毎日目にするつらさ。解体後、何もなくなった場所を見るつらさ。苦労は果てしない。片付けなければならぬ現実を少しでも短時間にしてあげる事。ボランティアの役割はとても大きい。

ボランティアセンターなどを見ると過去の教訓が生かされている。反面、センターを通さない依頼は受けなくて下さいという約束・・・。ボランティアセンターにお願いをするという簡単な作業が、実はハードルが高い。家のこまごました部分、今まで人に見られていない部分の片付けを、

誰かに頼むと言う事は「こんなことを頼んでいいのか」という遠慮との天秤だ。実際に片付け作業をさせていただいた家の方も、その事を口にされている。

そんなもどかしさは、実際に見たり聞いたりした私達が持ち帰り、伝えなければならない。ボランティアの在り方やセンターのやり方を非難するのではなく、公的な支援と民間の支援が共存し、バランスよく機能する事が、お互いの不足を補い、熊本のためになる事だ。

行つて終わりではない。そこから始められることを見つめる。自分が二度三度足を運ぶことが出来なくても、「一人の百回よりも百人の一回」的な考え方で、仲間を増やしていきたい。

『あかるく、げんきに、ありがとう・・・』は、熊本に届けたい思いだった。「どうしたら、やさしく背中を押してあげられるだろう？」想いをよせる、心を重ねるだけでなく、もう一歩進んだ支援は何か。自分たちの教訓が試されているように思った。

生きている今にありがとう。助ける人に巡り合えてありがとう、道路がなおつてありがとう。炊き出しが美味しくてありがとう。前向きに・・・そう思っても何が前向きなのかさえわからない。具体的に「ありがとう」の言葉を言うことで、前向きになれたらと思う。作業をさせていただいて

ありがとう。ありがとうが、頑張ってくださいよりも、もっと大きな励ましになってほしい。

そして、この言葉で自分にも勢いをつけていた。行動には、それなりの理由や準備が必要で、時期やタイミングに左右されることもあるし、時には勢いで突き動かされることもある。いざ行こうと思っても、服装だったり熱中症対策だったり、考える事が多かった。そして、暑さの中で作業が出来るのか体力的にも不安がある。大丈夫だという過信はないか？

しかし、多くの仲間と一緒にける事が自分の背中を押してくれた。後は自分次第。この言葉を持つていこう。

滞在中、何度も言わせていただいた。時と場合がふさわしかったか、おちやらかした行動にならなかったか、多少疑問もあるが、いつも熊本から駆けつけてくれた埜口先生には、「今までありがとうございました。これからは私たちが助けまっす」ぜひ伝えたかった。

そして、被災地支援という不思議なつながりでご縁をいただいた皆さんにも、「ありがとう」の気持ちと同じように伝えられた。一人で成せることは目の前の小さな範囲でも、右に左に、同じ思いの仲間がいて、それぞれが目の前の事についていねいに向き合うと、想像以上の大きな力となる。一日では終わらないと言われた片付けに、ある程

度のめどをつけられたことは、同じ立ち位置の仲間と一緒にしたからに他ならない。

今日で完結しない作業。明日以降、集積場に運び出す時、私たちはいない。だからこそ、残る作業が負担にならないように、終わりの見えない片付け作業が、終わりが見え、心のつかえがなくなる日になるようにしたい。暑さで分別がおろそかにならないように、放り投げて荷物がバラバラにならないように、ていねいにていねいに・・・もっと手早くとか、テキパキなどと誰も言わない。それでも作業がどんどん進む不思議な光景。立ち位置が同じ。感覚が同じ。この事の素晴らしさを特に強調したい。

あそこまでどん底だった自分が、ボランティアとして熊本に行けるようになった。つまり、誰もが助ける側、助けられる側になると言う事だ。何事も、自分の身に置き換えて考える。そこで知る事、気づくことは、自分にとって大きな財産になる。小さな小さな一人の力も、仲間の支えで大きくなる。

でも、何かをしようなどと思っはならない。本当に大切な行いは、無心と集中力から生まれる。ただ黙々と手と足を動かすだけ。出来る事をするだけ。

行動をおこせないことは、スタートラインに立ってない事ではない。私たちはいつもスタートライ

ンに立っている。前から手招きしている仲間。さりげなく背中を押してくれる仲間。そんな仲間巡り合えれば、スタートは切れる。日々ていねいに生きているか。そこが問われる。

終わりに伝えたいありがとう。この支援の準備をして下さった西橋先生や松浦先生、小峠先生。若手の道しるべである大谷先生や多くの先輩先生方。日本を美しくする会の皆様。米村さん。ありがとうございました。

★★福岡県 二十代 女性★★

この度、鍵山教師塾の先生方と初めて熊本復興支援に参加させていただきました。私自身、現在福岡県に在住しておりますが、未だに現地に復興支援に行けていないことが心につかえており、先生方が支援に行かれることを聞き急遽参加させていただきます。

ボランティアセンターに向かう道中では、地震の被害があまり感じられないほど、道などは既に舗装されていましたが、ボランティア先である益城町に差し掛かると、目を見張るほどの光景で言葉が失いました。以前、東日本大震災の復興支援に参加した時とはまた違う光景でしたので、私にとってその衝撃は大きいものでした。

熊本地震が起きた時、私は福岡県で震度四強の

揺れを初めて体感しました。その後も緊急地震速報が一晚中鳴り響き、一人暮らしの自分にとって不安で仕方なく一睡もできない夜を過ごしました。その時の自分と比べ物にならないくらい不安と恐怖を何日も抱き続けた熊本の皆さんのお気持ちを察すると、胸が締め付けられる思いになりました。

今回ボランティアをさせていただいたご家庭の小屋は、多くの農機具を収めたところで、ほとんどの物が使用不可能となり処分しなくてはいけない状況でした。また、古い備品も数々あり、地震が奪ったものは家だけでなく、仕事や思い出にまで至る現実を目の当たりにしました。そこにはご家族のいろんな思い入れがあるはずですが、割り切って処分を判断するお姿に「強さ」さえ感じられました。私たちができたことは、ひたすら物をどかし、分別することです。そのくらいしか、限られた時間ではできなかったのに、ご家族の方から「ありがとう」と心からの感謝のお言葉をいただきました。これ以上ない「ありがとう」という言葉の重みを感じました。そして、すぐに支援に来ることができなかつたことへの後悔と申し訳ない気持ちが再度湧いてきました。

復興支援に参加させていただいて、自分の心が鈍感になってしまっていたことに気付きました。困っている人、助けを求めている人がいる

と頭が理解し行動に移すまでの時間が長くなってしまっているように思い反省いたしました。また、熊本地震のみならず、東日本大震災など地震の被害に遭われたところは、完全に復興するまでに何十年もかかることを考えると、継続した支援の必要性を改めて感じました。被災地への想いだけでなく、想いを形にし続けられる方法を自身でも考えようと思います。

最後に埜口先生のご家族、米村先生を始めとする復興支援活動にご尽力してくださった皆様にご心より感謝申し上げます。

★★大阪府 五十代 男性★★

今回、NPO法人「日本を美しくする会」のご厚意で、熊本地震の復興支援に参加させていただくことができましたこと、心より御礼申し上げます。

現地に赴ける人、行けない人。それぞれの状況によって、出来る支援の種類は変わってくるかと存じます。私はたまたま「赴ける」状況にあったので、今回迷わず応募いたしました。

しかしながら、そのご支援に見合うだけの活動が自分にできたのか、知るべき情報をしっかりと摂取して周囲にお伝えできているのか、まったく自信がありません。せめて、現場での活動の記録、

そしてそこで自分の感じたことなどを以下に記して、一矢報いたいと思います。

平成二十八年八月八日(月)。お天気はかんかん照りの快晴。益城町小谷の民家にご依頼の現場でした。家屋は全壊しているうえ、たび重なる豪雨になすすべもなく、畳はまだジュクジュクに水を含んでいました。家財道具や畳、戸などを分別して、庭の上に置いていきます。五〇坪ほどの庭を挟んで向かい側には納屋がありました。数々の農具や藁などが雑然と放置されていました。家屋も納屋も業者に解体してもらうため、中身はすべて廃棄して、きれいにしておかないとならないそうです。

納屋の二階から一階に、ありとあらゆる荷物が放り投げられます。そのたびにホコリが上がって屋内に充満しました。一階の奥にあった農具のなかには、百年ものの「唐箕」や「糸車」もありました。依頼されたご家族やそのご先祖様の歴史が、またたく間に運び出され、すべて廃棄処分とされていきました。二〇余名で作業を分担すると、とてもとても大きな力になります。

作業が終了した昼の二時頃、最高気温は三六度にまで上がっていました。こまめに水分補給と休憩を取ったので、熱中症を予防できたかとは思いますが、なかにはギリギリの方もおられたかと存じます。それでも、依頼主よりアイスやかき氷、

お茶などを差し入れて下さったり、鍵山相談役がお昼ごはんを手配して下さいたりしたおかげで、私たちも無事に活動を終了することができました。

東日本大震災の復興支援のときから薄々感じていたことですが、現地でのボランティア活動はどこかしら掃除に似ています。

うまく論理的にお話することはできないのですが、「きれいにする」ということや「すべてを受け容れる（しかない）」ということや「掃除やガレキ撤去に共通している心の持ち方だと思えます。そして「工夫する」ということ、また「絶えず自分の仕事を探す」という感覚も、大人数でトイレ掃除をするときの心持ちに重なります。「一人の百歩よりも百人の一步」というのも同じです。

何より、炎天下の活動のなかで絶えず自戒しておりましたことは、「ていねいにする」ということでした。暑くて集中力を欠いて、分別が適当になつたり、置き方がさつになつたりしがちです。ご依頼主のお気持ちに自分の心を重ねたとき、どれほどの哀しみがこみ上げてくるのか。その哀しみを想えば、どれだけでいいいにしても、しすぎということはないように思います。

「日本を美しくする会」の皆さまが「行つておいで」と、快く私たちの背中を押して下さいるのも、

そのように共通する部分があるからかもしれない、と休憩中にぼんやりと一人で考えていました。

活動終了後、私たちの同志にして益城町を故郷にもつ埜口経司先生のご案内で、益城町を歩いて回りました。四月の本震で崩れた街並みは、まだそのままでした。もうかれこれ四カ月も経つというのに、まったくの手つかずでした。なぜ、これだけガレキ撤去が遅々として進まないのか、私には分かりません。毎日毎日この街並みを目にして暮らしている地元の方々の頭の中は、まだ四月一日のままに違いありません。

仮設住宅の建設は何か進み、引越しがはじまつてはいますが、まだまだ現時点での入居率は低いようです。しかも、農家の方が多いので、どうしても作物の発育の関係上、農繁期の今は畑のそばにある全半壊の自宅のそばにテントを張つて（もしくはビニールハウス内で）、寝泊まりをしないといけないこともあるそうです。被災された方全員が仮設住宅に入居できたとしても、それは復興のゴールではありません。

マスコミで取り上げられることが減ってきた熊本地震ではありますが、とにかく常に情報に触れて、想いを寄せて、祈り続けていかなければならぬように思います。

今回もご支援を賜わりまして、本当に有難うございました。以上をもちまして、私の報告文とさせていただきます。

させていただきます。

★★京都府 四十代 男性★★
思いが共鳴する瞬間

石巻と益城町がつながった。浅野さんと埜口先生の思いが共鳴した。

埜口先生は私達のために、ホテルやボランティアアセンターに家族と共に足を運んでいただいた。お話をされる度に、目頭を熱くさせる埜口先生の姿が印象的であった。お話をされる度に色んな思いが溢れ出るのだろうが、決して否定的なことは言われず、ただただ前を向き、感謝を述べられた。

かたや浅野さんにとって、地震のあった熊本で活動するにあたり、どんな気持ちでおられたのだろうか？五年前のあの日のことが間違いなく思い起こされるだろうに、「私も埜口先生に家をきわんばかりに活動されていた。

このお二人の思いは、ただ単に持ちつ持たれつの軽いものでは決していない。それぞれの人生において、最も辛い出来事であり、しかしそれを家族のため、同志のため、いや故郷のために、全身全霊で乗り越えようとされており、そんな思いが人間の奥底に眠っている「生きるんだ」という強い魂を呼び起こし、その魂と魂が共鳴し始める瞬間

を我々は間近で見させていただいた。さらにその魂の共鳴が、一つの合言葉によって、まわりも同化していくこととなる。そう、「明るく 元気にありがとう」の言葉。この言葉を他の誰かが言ったとしても、上滑りするだけで、浅野さんが言われるから、みんなの魂にスイッチが入る。

そして、今回ボランティアをさせていただいた青木さんにもその思いは間違いなく飛び火した。最後に言われた言葉がそれを表す。

「みなさんに来ていただき、何日もかかると思っていた作業が一気に済みました。こうやってしていただいたことを、今度は私達もしなければという気持ちになりました。本当にありがとうございました。」

今まさに倒れようとしている納屋と中身が空っぽになった家を前にして、他でこのような地震があつたら手伝いにいくと言われたのである。これからどうすればいいかまだ先行きも見えない中で、していただいたことに対する御礼を何かの形で表したいという思いが先行した瞬間であつた。浅野さんと埜口先生の思いが、依頼者の方にそう言われたのだろう。

先日、このような話を聞いた。

「本物の炭ってどういうのか知っていますか？ホームセンターで売っているバーベキューなどで使う炭は、本物ではありません。本物はもつと

細くて硬く、隙間がなくなるんです。そうすると、バーベキューで使う炭のようにはすぐに火がつかみません。さて、ではこの本物の炭にどうすれば速く火をつけることができると思いますか？答えは、本物の炭に火がついているものを置くだけで火がつくんです。人も同じです。人に火をつけるには、火のついている人が近くに行くだけでいいんです。」

ここに復興支援活動の意味を感じた。浅野さんと埜口先生の火が、我々にうつり、さらに被災された依頼者一家に火をつけた。まだまだ続く復元作業であるが、それをやり続ける元気を与えられたのではないだろうか。

我々は教師である。火のついている状態で、生徒と向き合う責任がある。その火を燃え続けさせるために必要なことは、唯一実践であり、その実践を続けさせる原動力が思いである。浅野さん、埜口先生の思い。大谷先生の思い。そして鍵山先生の思い。そんな思いをいっぱい知ってしまったからこそ、生まれてくる使命。今度は教師と生徒の思いを共鳴させる番である。そんな思いを抱かせていただく復興支援活動であつた。

大谷先生はじめ、西橋先生、松浦先生、小峠先生には、ホテルや車の手配、時間の確認など多くの心遣いをいただき、感謝しております。このような役をしていただけるからこそ、得られた思い

であることを肝に銘じて、これからも実践を続けたいと思います。ありがとうございました。

★岡山県 四十代 男性★

このたび熊本へ支援に行くということで山口からのレンタカー代を日本を美しくする会より捻出していただき誠に感謝申し上げます。熊本の地震から四カ月が過ぎてしまいました。もつと早くにお手伝いできればよかったです。このタイミングになってしまいました。現地に足を運ばなければ見えないこと、見えたことを目の前にいる生徒に伝えていかなければいけません。今回は益城町のボランティアセンターより依頼がありましたお宅での作業でした。「自分の家族だったら」「親戚だったら」という思いで一つずつの作業を丁寧にさせていただきました。とにかく暑かったですが、それよりも作業に没頭しているいろいろな思いが巡ってきて暑さを感じませんでした。今までの生活、これからの生活。命あることに感謝しないといけないと思いました。石巻の浅野さんとご一緒できましたことも感慨深いものがありました。被災されたご家族に話をされていましたが、本当にその方々のお気持ち自分自身と重なり苦しかったと思います。しかし、ご家族の方はその思いの深さに救われたのでは

ないでしょうか。震災後に頑張っている方は震災前も頑張っていた人。今をどのように生きるのか。命を大切にしていくなのか。この復興支援ではとにかくそのことを深く感じました。今回は思いある方々と一緒にでき、私自身の生き方をもう一度見つめなおすことができました。日々の生活で「生きる」ということを真剣にそして樂觀的に行っていきたいと思います。ありがとうございます。

このたび熊本へ支援に行くということで山口からのレンタカー代を美しくする会より捻出していただき誠に感謝申し上げます。熊本の地震から四カ月が過ぎてしまいました。もっと早くにお手伝いできればよかったです。このタイミングになってしまいました。現地に足を運ばなければ見えないこと、見えたことを目の前にいる生徒に伝えていかなければいけません。今回は益城町のボランティアセンターより依頼がありました。お宅での作業でした。「自分の家族だったら」「親戚だったら」という思いで一つずつの作業を丁寧にさせていただきました。とにかく暑かったです。それよりも作業に没頭しているといういろいろな思いが巡ってきて暑さを感じませんでした。今までの生活、これからの生活。命あることに感謝しないといけないと思いました。石巻の浅野さんと一緒にできましたことも感慨深いものがありました。被災されたご家族に話しを

されていましたが、本当にその方々のお気持ち自分自身と重なり苦しかったと思います。しかし、ご家族の方はその思いの深さに救われたのではないのでしょうか。震災後に頑張っている方は震災前も頑張っていた人。今をどのように生きるのか。命を大切にしていくなのか。この復興支援ではとにかくそのことを深く感じました。今回は思いある方々と一緒にでき、私自身の生き方をもう一度見つめなおすことができました。日々の生活で「生きる」ということを真剣にそして樂觀的に行っていきたいと思います。ありがとうございます。

★★奈良県 二十代 男性★★

四月十四日に起こった震災から約四ヶ月。震災二週間後に行かせていただいた時と比べ、道路が整備され、テント村や車中泊をされていた方々も減っている。目に見える少しづつの復興はその時に比べあるが、現実避難所生活をされている方々、家が倒壊し大変な生活を強いられている方々が多くいる。現地に入り、その光景を目の当たりにした時に、自分が平和ボケしていることに改めて気づいた。やっと仮設住宅が建ち始め、避難所に比べ少しの安心した生活が送られるようになってきたと聞いた。目に見える復興が少し感じられるが、目に見えない復興は比べものにならないくらいのものであるのは間違いないことだと感じる。

活動の朝、益城町にあるボランティアセンターに着くと、早くからボランティアセンターを運営してくださる方がたくさんいた。毎日ボランティアを受け入れる準備をしてくださっている。トイレ掃除と同じで準備をしてくださる方に感謝の気持ちでいっぱいになった。道具などが置かれているテントは様々な工夫がされていた。ただ分けて置かれているだけでなく、紐で吊るされていたり、ペットボトルを加工し雨樋のようにしていたりと、運営をされていく中で考え、工夫されていることがわかった。かつ、道具がわかりやすく整理整頓され、それはボランティアに来る人たちのことを考えているのが伝わってきた。何をするも「人のために」を思うことの大切さを感じさせていただいた。

活動させていただいた場所は農家をされている家庭。熊本の埜口先生の縁のある方で、また不思議なご縁を感じた。地震により納屋がぐちゃぐちゃになっており、その物を出す、そして実家の中の物を出すことをさせていただいた。話を聞くとき、家も取り壊し建て直さないといけないということだった。そのために中の物は全て出して欲しいとおっしゃった。畳や障子、電気器具、外には瓦や壁材の破片が多く散乱していた。今回は分別が厳しいことも伺っていたので、ていねいさをしっかりもって取り組もうと思った。家を取り壊

す前に綺麗になった状態に少しでもできればというのが思いだった。一つ一ついいねいに拾って分ける、その繰り返し。その日はとても暑く、ヘルメット、マスク、長袖長ズボンはなかなかの体力的にもきつい状態だったと思う。でもたくさんの方の心遣いのもと私たちが活動できている。日本を美しくする会の支援、正春さんの差し入れ、そしてその被災者の方から飲み物やアイス。たくさんの方の心遣いをいただいている。そんなことを思うと、させていたでいることに感謝の気持ちでいっぱいになった。その感覚にさせていたでいることが幸せ。仲間と活動できる、また新しいご縁をいただく、やはり実際に足を運ぶことで感じられることがある。今までの積み重ねが今の自分を作っていることにも、改めて気づかせていただいた。

これからも自分にできることは何か、自分の使命は何か、足元を見つめその時にできることをできるときにさせていただければと思います。ありがとうございます。

★大阪府 三十代 男性★

熊本の埜口先生のご家族の笑顔が見られて良かった。そして今回、お宅の片付けの手伝いをさせていただいたご家族の笑顔が見られて、本当に

良かった。それに尽きると感じました。自分自身が身体を動かすことで、どなたかが喜んでくれる。それが自分にとって嬉しいことであり、自分自身にまた新たなエネルギーをもらっているのだと強く感じました。心の奥に湧き上がってくる熱いものを感じております。自分自身の小ささと、皆様からいただいた幸せの大きさ。いただく量の方がいつも大きく、まだまだ何も返せていない自分であります。

笑顔を見ることができたとと言っても、その笑顔の裏には、倒壊した家屋の現実を目の当たりにするなど、日々大変なつらい想いがあるのだと想像すると、やはり胸が苦しくなります。まだまだ何か出来ることはあるのではないかと思います。スピード早く動けない私ではありますが、何かひとつでもお力になれることがあるのなら、させていたできたい。そう思います。

今回、様々な面でバックアップしてくださった日本を美しくする会の皆様をはじめとする全ての方々に、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。ございました。このような機会を与えてくださった大谷先生、準備の段階から細やかに動いてくださった西橋先生、小峠先生、共に活動させていただいた皆様、私たちが温かく迎えてくださった埜口先生ご家族、ありがとうございました。

★和歌山県 四十代 女性★

復興支援活動の依頼者は埜口先生の先輩にあたる方のお宅に入らせて頂きました。敷地の中にはリフォームを三度もされたという本宅と、農作業用の倉庫がありました。長い時間をかけて大切に守ってこられた家でした。節目をむかえることに立て直しを何度もされてきた思いの詰った家でした。リフォーム直後に地震が襲ってきました。

主に玄関から一階部分に入らせて頂きました。ガラス、板、壁などが散乱し、天井を見ると梁や屋根が見えていました。地震の凄まじさ、その後の余震や豪雨に曝された惨状を目の当たりにし、胸が締め付けられました。

「知覚動行（ともかくうごこう）」「瓦礫は我歴」「ひとつづつ丁寧」「ひとつ拾えばひとつきれいになる」・・・復興地で何度も心に刻み、励まされてきた言葉が再び蘇りました。二〇数人のメンバーが一丸となりそれぞれの役目を果たされていきました。お昼を過ぎて暫くたつと、床が見えてきて、なんとなく元のお家の様子が伺えました。けれども、依頼者のお宅は取り壊しが決まっているということでした。

話は変わりますが、主婦は家の掃除をする時、ある程度のルーティンが決まっています、初めに掃除を始める場所、掃除機をかける場所、拭き掃除

をする場所など決まった動線で動くことが多いのではと思います。長く住んでいる家であればある程、それはあると思います。そして、晴れの日も、雨の日も、嬉しいことがあった日も、辛いことがあった日も、思いを掃除道具に乗せて、掃除をし続けます。家族のために。きっと、依頼主さんの奥様もこの家を大切に守り、掃除をしながら居心地の良い空間を作ってこられたのかなあと、教師でもなく、ボランティアでもなく、主婦目線の自分がいました。

そして、そんな家族をどんな日でも、毎日迎え入れ、送り出してきた「玄関」は特別なものを感じました。けれども、もうすぐ取り壊されてしまう・・・。大役を勤めてきた「玄関」を少しでも元通りの雰囲気に戻したいと強く思いました。二度ときれいにきれいなまま取り壊されるなんて悲しすぎる・・・、このまま帰れないと思いました。本当に自分勝手な考えは十分承知なのですが、すべてのものが取り出されていく敷地の中でも、この玄関に生き返って欲しいと思いました。

と同時に、以前、広島土砂災害の時に行かせて頂いたお宅での作業を思い出しました。山崎先生や水野先生が思い出のレコードやCD、花器を丁寧に扱うことで「生きる希望が出てきました。」とすごく喜んでもらえたことを思い出しました。

帰る間際に、「今しかない！」と思い、一緒に

作業をしていた路佳先生にもお願いをして、玄関の雑巾がけをさせて頂きました。廊下と、玄関、靴箱を拭くと、家が最後の言葉を残してくれているようでした。奥様もこうやって、長いあいだこの床に雑巾をかけてこられたのだろうなあと感慨深く感じました。

「まだ住めるみたいだなあ」と青木さんは仰って下さいました。叶わぬ願いであることが辛いです。これからもまだ熊本は、震災中が続きます。関西で出来ることを考えながら、必ず機会を作り熊本へ行きたいと思っています。

今回は、浅野さんも一緒にできるということで、嬉しいのと、終始不思議な感覚でした。ここは石巻なのか、熊本なのか？浅野さんは、再会した埜口先生と言葉にならない感情で会話されていました。息子さんには「男だね、よく頑張ったね」というような浅野さんでしかかけられない言葉をかけられていました。

夜の懇親会合宿では本当に大笑いの楽しい時間を過ごさせて頂きました。関西メンバーの志乃先生から託された「絆タオル」を美穂先生に受け取って頂きました。療養中の山本先生も応援してくれていました。藤尾さんからは万華鏡のセットを熊本まで六五〇セット送って頂いております。事情で来られなかった多くの方々に支えられています。レンタカーや交通費、昼食も日本を美

しくする会からの支援がありました。米村さんも、ボランティアセンターと依頼者宅に二回も顔を出して下さり、ネクタイをしめたまま一緒に汗を流しておられました。八女の高橋先生も私たちが帰ったあとも続けて作業していただいています。この体験記や今回の様々な手配も西橋先生や松浦先生にお世話になっていきます。見えないところでそれぞれの仲間がみんなのために動いて下さっています。なによりいつも私たちを導いてくださるリーダーの大谷先生には感謝してもしきれません。本当に大きな大きな輪の中で生かされていることを感じます。

人生が眷物であったとしたら、台本があったとしたら既にこうなることは決まっています、「だから出会っていたんだ」「この出会いがこう繋がるんだ」と紐解くようになっていくかもしれない。今回の熊本での経験はもう次に繋がっていると思います。

★大阪府 五十代 女性★

八月七日夜八時三十分過ぎ、熊本駅に西橋先生に迎えに来ていただく。今回のボランティアは四人なんだと思つて「火の国ハイット」に着いた。十二名の方がおられてびっくり。なんと石巻市の浅野さん、北海道の石井先生、沖縄県の仲田先生。

もうびっくりびっくり!!

浅野さんに「もうだいたい面白い感じですか。」と聞くと「(震災の)心の傷は一生消えない」と言われた。「あの日からパジャマで寝たことはない、リビングで寝ている。パジャマではいざというとき、娘を助けることはできない・・・。」あーそうだったんだ・・・。今もいつも心と体を地震に備えておられるのだ。埜口先生が言うには「浅野さんのメールが心の支えだった。」と。浅野さんは浅野さんの家の片づけをしてくれた埜口さんがまさかこんなことになるなんて・・・と。浅野さんは言う。「このころの中のことを全部吐くほうがいいんですよ。特に男性は。(男性は自分が泣き言を言うてはいけな思っているから)」そんな話を聞いていると横から大きな笑い声が・・・。

埜口さんのお子様二人が松浦先生や石崎先生、小峠先生らと笑い転げている。アプリで画像を編集するともう笑わずにはおれない楽しい顔になる。その姿を見ていた埜口先生ご夫妻は「子供たちがこんなに笑っているのは初めてです。余震のたびに恐怖心が襲っていたから。今日はぐっすり眠れると思います。」(実際帰りの車に乗った途端、眠ったそうだ)

次の日、依頼者のお家の納屋を片づけることになった。今日は集積場が閉まっているということので十三品目に分別する作業。網やビニールハウス

のビニール、段ボール、麻袋、ポット、農作業に使うさまざまなものや木材、金属、昔の農機具、農薬など様々なものがあつた。お家からは畳やふすまなどを運んでいた。作業が終わったとき青木さんは「二、三日かかると思っていました。こんなに早く片付けてもらって・・・嬉しい。ありがとうございます。」と。最後に浅野さんが「(震災後今日まで)よく頑張られました」と依頼者に声をかけられました。被災された浅野さんだからこそ本当に気持ちかわかるのだ。依頼者の話では、家と納屋を全部やり替えたら八千万円はかかる、と。作業後、埜口先生に益城町を案内していただく。

避難所である体育館は病院のようにカーテンで仕切られていてまた石巻の体育館とは違う印象を受けた。町は想像以上に壊れていて陸の孤島だった益城町にや々と道路が復旧したと説明を受けた。二階の屋根瓦が足元にあつた。阿部さんは道路のゴミを拾いながら歩かれていた。この暑期中、おそらく一番高齢の阿部さんの率先垂範の姿勢に私はまだまだと反省。

ボランティアセンターで説明をして下さった方は長崎の方、そして今回のリーダーの方は以前は車関係のお仕事をされていたそうだが、今回の地震をきっかけに仕事をやめ、このボランティア活動に入ったということだ。世の中にはすごい人がいっぱいいる。

米村さんも朝も昼も訪れてくださり、私たちがトイレをするために車で運んでくださったり、差し入れをしてくださった。依頼者からも冷たい飲み物とアイスクリームをいただいた。山口県からのレンタカー代、宿泊費の一部、ガソリン代、昼食代など、日本を美しくする会から援助していただき本当にありがたい。また山口の地に鍵山先生が駆けつけてくださったと聞き、本当に頭の下がる思いだった。

博多まで車で送ってもらい、お風呂に入る。新幹線で川合先生や三谷先生とご縁の不思議さを語っていた。一日だけの参加だったがクマもんなような依頼者の笑顔が印象的だった。今回も本当にたくさんの方にお世話になりっぱなしだった。参加させていただき本当にありがとうございます。日本を美しくする会、米村様、埜口先生ご家族、依頼者様、お心づかいありがとうございます。

★大阪府 三十代 男性★

東日本大震災から、早五年が経ち、何度か足を運ばせていただきました。以前、復興とは程遠く、けれど、そこで生きる人は祖の当時の思をしつかりと残して、今を生きているように思います。そこに思いを寄せて、寄せつづけていきたい。そう

思っていた今年の四月に熊本県中心に大震災が起きました。私事ですが、父の実家が九州は佐賀県にあり、九州は小さいころから慣れ親しんだ土地でした。四月十四日は、高槻で毎月行っている掃除の会でした。参加した方々と振り返りの食事をしている最中の速報でした。

それから、数カ月。山口から志ある先生方とともに、レンタカーに同乗させていただき、熊本に入りました。何度もお話させていただいている先生方と、同乗させていただきました。前の晩に熊本市内に入りました。夜の会の買い出しをさせていただき、部屋に入った時の少し緊張した空気を思い出します。そこには、七月に大阪でご講演頂いた埜口先生のご家族の姿がありました。テーブルを並べ、そこにお菓子などを並べ、始まりました。埜口先生の娘さんから、素敵なお菓子のプレゼントに私たちの方が、とてもエネルギーをいただくことになりました。またお子様の素敵な笑い声にも癒されました。

翌日、埜口先生ご家族の車に案内していただき、益城町のボランティアセンターにつきましました。朝のうちからとても暑く、汗が流れるほどでしたが、ボランティアセンターには、たくさんのボランティアの方がいらっていました。受付の時間を待つ間に、米村さんより、栄養ドリンクの差し入れがありました。生き返ったように思います。受付が

始まると、一緒に行動している先生方と同じ場所に活動させていただくことになりました。

活動場所に移動する中でも、たくさんの家屋が当時そのまま、まったく復興が進んでいないと感じました。活動場所は、震災で被災したご自宅と農機具が並ぶ大きな納屋でした。家主さんの挨拶のあと、作業が始まりました。家の中から畳をすべてだし、設えを取り去る作業でした。日中の気温は三十六度とありましたが、皆さんが最低限の言葉で作業を進める姿が印象に残っています。「できる人が、できる時に、できることをする」の言葉が頭をめぐり、それぞれに自分に力を最大限に活動している姿がそこにありました。黙々と畳をトラックに積み上げ、藁を寄せました。マスクがすぐに額から流れる汗でびしょぬれになりました。それでも、体力の続く限り、掃除をつづけました。

昼休憩や途中の休憩では、活動場所の方から本当に心のこもった差し入れをいただきました。米村さんや埜口先生からの差し入れをいただき、益々、活動にエネルギーをいただきました。お昼過ぎには、帰阪の時間が近づき、最後まで作業が完了しなかったことが心残りです。

作業が日段落したところで、埜口先生が益城町を案内してくださりました。普段、住まれる益城町は、報道されている状態のまま、復興の兆

しかなかったように感じます。一筋はいると、まだ倒壊した家がたくさんありました。一部、解体している場所もありましたが、その差がとても大きいように思いました。

何度か復興支援に関わりボランティアをさせていただくことで、いつも活動させていただくと、「ありがとうございます」「ありがとうございます」「ありがとうございます」と感謝され、活動する側がエネルギーをいただくように思います。そこには、いつもどこか心の底でつながっているということではないでしょうか。困った時は、お互い様。そんな言葉が宙を舞う現代に、まさに足を運び、心を寄せ、身体を動かすことに、本来の価値があるように思います。

これからも、熊本に、九州に心を寄せたいと思います。今回も大変お世話になりました。

★★兵庫県 三十代 女性★★

「ひとつ拾えばひとつだけきれいになる」皆様と一緒に熊本の復興支援活動に参加させていただきました。

私が今回の活動に参加したいと強く思ったのは、宮城の浅野さんが参加されるというのを知ったからです。浅野さんとは、大阪便教会の東北の復興地に学ぶ会で出会いました。浅野さんは、人

の心に火を灯す人だと思いません。私は、石巻で火をつけてもらいました。浅野さんの言葉を聞くと、元気になると思います。自分のままで、自分の場所のできることをがんばろうと思えます。

だから、今回はどうしても参加したいと思いました。

熊本に行くとき、浅野さんにたくさんお話していただきました。浅野さんは、「今」できる、未来への準備を行動に変えておられました。自分の命を使ってできることを考えておられました。そういう方々の生き様を傍で感じさせてもらえるのは、ありがたいことです。

埜口先生ご一家と夜一緒に過ごさせていたただいたとき、皆さんのあたたかさに満ちた空気の中で、二人のお子様の笑い声が響いていて、子どもの笑顔は本当に尊いと思いました。

益城町のボランティアセンターに行ったとき、朝早くから、ボランティアの方々があちんと並ばれていて、センターの方が、わかりやすく丁寧に説明してくださって、作業のしやすいように道具がきれいに管理されていて、日本人の美德のかたまりのような場所にいられることに、感謝の気持ちでいっぱいでした。

大きな納屋の片づけを手伝わせていただいているときに、先生方の姿勢に頭の下がる思いでした。皆さん、目の前の荷物のことを一二〇%の目

で見ているらっしゃって、一つひとつの動作が丁寧で、細かな紙一つに対しても、全力で向き合っているらっしゃいました。その視線の強さに、普段のすべての生き方が、一挙手一投足に表れるのだと思います。

途中に埜口先生が、いきなり団子を差し入れてくださいました。米村さんが、お車でトイレがある施設まで連れて行ってくださいました。

何もかも、すべて皆様に守られて、活動をさせていただきました。トイレ掃除のときと同じで、もしこれで自分が何かいいことを少しでもしたのだと思ったら、こんなにも恥ずかしいことはなような気がしました。

埜口先生に益城町を案内していただきました。落ちていくゴミを拾わせていただきました。タバコの吸い殻がいくつも落ちていました。拾っているときに、鍵山相談役の「心のすさみをなくす」という言葉を思い出していました。家が倒れ、悲しい景色が続く中に、それでもゴミがあつては、心のすさみが取れることがないような気がしました。

体育館のお手洗いをお借りしたとき、若いボランティアの方々や床や窓の掃除をされています。ゴミを分別しましょう、という張り紙、運動をしましょう、と呼びかける張り紙、みなさんが、心のすさみをとめないように、場をきれいにし

いらつしやいました。

ひとつ拾えばひとつきれいになる。鍵山相談役のお言葉は、どのような環境であろうと変わらぬ大事な真理だと感じました。

熊本に行かせていただき、日本人の「恩」をたくさんいろんな場所で感じさせていただきました。熊本の方々のことを自分事するには、心を寄せるには、忘れないためには、行動に変えるしかないのかもしれないと思いました。

「明るく、元気に、ありがとう」 本場にありがとうございました。

★★大阪府 三十代 女性★★

【益城町でのボランティア】

ボランティアセンターの方々は、きつととてもお疲れのはずなのに、とても丁寧で優しくかったです。テントの端々に、上手に雨水を逃がせるような手作りのペットボトル工作が設置されていました。全国からのメッセージがたくさん飾られていました。東北からのものが多く、ネパールからのももありました。活動後に使用して下さいと温水シャワーがあつたり、道具の貸し出し場所など様々な場所にくまモンとともにメッセージが書かれていたりして、センターの方々のお心遣いが表れていました。集まっているボランティアの

方々も、明るくて生き生きされている方が多いように感じました。

活動は、大根農家さんの個人宅と倉庫の片づけのお手伝いでした。前日のお宿とともに、そのおうちの方も埜口先生との繋がりがあり、埜口先生の地元だということを実感しました。これが自分の地元で、こんな風に、様々な繋がりの方々と出会うことになったらどうなのだろうと思いましたが、まだまだまだ、自分自身のこととしてはとらえられてはいないと感じました。

たくさんの歴史が詰まった倉庫とおうちは、2人で丸一日お手伝いして、やっと、あとはご家族でできるのかなと思える位までお片付けすることができました。(もし、五、六人だったらいいたい何日間かかったのかな。仲間ではげまし合ったり、周りの頑張りを見たりできるからとても暑い中でも活動し続けられる。冷たい差し入れや感謝の言葉をいただいて、こちらこそという感謝の気持ちで活動できるけれど、もし自分が家族とだけ取り組むとしたら、絶対にこんな風には活動できないな。)と思いました。本当に周りの方の存在というのはとても大きいなあと改めて感じました。

地震があつてからの苦労も、もう笑うしかないとお話しされ、現実と闘いながらも私たちにたくさんお礼を伝えてくださったおうちの方々。そ

して、長期ボランティアをされている方々からパワーをいただきました。

【埜口先生と歩く益城町】

一階部分がつぶれてしまっているおうちが多かったです。一階ガレージで車がペしゃんこになっていたり、屋根が波打っていたり、傾いているのが見てわかるのにどうしようもないおうち。亀裂が入った壁や道路。たくさんのどうしようもない景色がありました。赤い紙、黄色い紙が貼られているおうちが目の前にあるけれど、どうにもできない。手をつけることもできない。ということがとてもよくわかりました。次にいつあるかわからない地震が怖いのです。今、目の前にあるこのおうちにお手伝いの手が届くまで、あとどれくらいかかるのだろうと考えると、まだまだもつと人の力がいると思いました。

【DAWでのボランティア】

あと一日活動させていただきました。石巻の石森さんのご縁で、大阪で知り合った方が開かれたセンターだったので行かせていただけ嬉しかったです。DAWさんには、直接、地域の方がいらつしやつて相談されていて、とても身近な支援環境だなと感じました。

抽選で当たられた仮設への引っ越しや、カーテンの取り付け、崩れてしまったブロック塀の片づけなどをお手伝いさせていただきました。どれも

二、三人で数十分でできるお手伝いでしたが、だからこそ、困り感をとて身近に感じることでできました。そして、直接ご自身やご家族のお話を聴けたり、お手伝いをとて喜んでいただいたりして、「この方の力になれたなあ。」と実感できました。大勢で大きな成果をあげるのとはまた違ったうれしさを感じられました。こんなこと位で手伝ってもらっていいのかと悩んだお話も伺い、DAWさんのように地域に密着されて相談しやすい環境をつくってくださる方の存在の大きさを感じました。

近くにある「つむぎ藍」というベースの引き上げのお手伝いもさせていただきました。その代表は女性の方で私と同じ年でした。自分たちを「宿無し」と表現されていました。「お手伝いをしに行く」というのとは次元の違う活動をされている方々の存在を知りました。ネパールとも支援の関係で関わっておられて、国境なんて簡単に飛び越える関係を築かれているのだろうなあと思いました。

【活動を通して】

「復興地に学ぶ会」で出会った方々と熊本の支援に携わらせていただけるのがとてもうれしかったです。何より、浅野さんが駆けつけてくださって一緒に活動させていただけたことがとても大きかったです。埜口家のみなさんにとつてどれ

ほど心強いことか、想像のつくことではないと思います。でも、その場に一緒に居らせていただけて、心からなんだかほっとしました。

みんなで前日にお宿で過ごした時間。温かくて、みんなの自然な笑顔がたくさんあふれていて、正直に本音で話し合える場があつて、そこにいられるだけでしあわせだなあと感じる時間でした。埜口家のみなさんがとても笑顔だったことが一番うれしかったです。

北海道から沖縄まで全国の仲間が繋がつていて、助け合えることが実感できてうれしかったです。まったく同じ想いをするとはできないし、感じ方も人によってすぐく違うのだろうけれど、「仲間」っていいなということを感じました。その輪をもっともつと広げていきたいなと思いました。

たくさんの準備や連絡をしてくださった先生方、「日本を美しくする会」のみなさまのおかげでかけがえのない時間をいただきました。本当にありがとうございます。

★★北海道 四十代 男性★

四月の地震から四ヶ月、大切な仲間のいる熊本にやっど行くことができました。

普段通りの日常を送っているように見えた市

内とは一変し、益城町に入ると倒壊した家屋が至る所にある状況に言葉が出ませんでした。

今回はご自宅と納屋にあるものを外に運び出す作業をさせていただきました。地震から四ヶ月が経ち、現地で過ごす方々も現実を目を向けなければ立ちゆかないのだとは思いますが、今まで大切にしていたものがゴミとして運び込まれていくのを目の当たりにする、その心情を私たちがわかるうとしても、心寄せることはできるのかも知れないけれど、無理なのだろうと思いました。そして、一日、しかも、数時間で去ってしまう私たちを本当に心から受け入れてくれているのだろうかということも考えます。

「どうせ当事者じゃないし。」

だからこそ、心を込めて一生懸命活動させていただきました。それしかできませんでした。

忘れてはいけないと思います。震災のこともそうですが、人は支え合つて生きていることをです。今回、熊本へ入るために日本を美しくする会から多大なお気持ちをいただきました。また、平日にもかかわらず、米村さんは差し入れをもつて駆けつけ、尚且つ、Yシャツに汗をびっしょりとかきながらお手伝いもされていました。埜口先生は前日の夜、当日の朝早く、活動が終わってからと、私たちの活動に合わせて予定を入れて下さいました。

教師だからこそできることがあります。今回の活動で感じた想いを、家族、そして、目の前の子どもたちに行動・実践で伝えていきたいと思えます。ありがとうございます。

★★長崎県 五十代 男性★

まずは、今回の復興支援活動に際し、企画、準備、運営していただきました大谷先生をはじめとする熱き心を持たれる諸先生方、日本を美しくする会の皆様、米村様、埜口先生、食事を差し入れてくださった鍵山相談役、大変お世話になりました。特に、連絡等では西橋先生にはとてもお世話になりました。ありがとうございました。

【仲間と活動することの良さ】

熊本地震の復興支援活動をさせていただくのは、これで三回目になります。一回目は長崎から出るボランティアバスに乗せていただき西原村で活動しました。二回目は私の高校時代の友達が被災しましたので、その支援で熊本市内に行きました。今回は、東北地震の復興支援の時からお世話になってる同志の先生方と一緒に活動するというところで、過去二回とは違った学びを得ることができました。長崎を朝の四時過ぎ頃出発して、西橋先生と連絡を取りながら、なんとか益城町ボランティアセンターで合流できました。配慮し

ていただき、メンバー全員が同じ場所での活動となり、とても心強かったです。活動は被災した農家の方の家屋から物品を出し、選別、分別をする作業でした。農家の倉庫ということで、昔の道具が出てきたり、わらが出てきたり、農薬が出てきたり・・・。家主の方も、気さくな方でいろいろと指示を出してくれたのでとても動きやすく、共に活動ができました。外での活動であったので、土埃がひどく、マスクがないととても厳しい状況でしたが、あいにく私は持つてきておらず困っていたところにマスクを差し伸べてくれた同志先生がいてとても助かりました。また、とても熱かったので、休憩をこまめにとつていただき水分補給をしたのですが、その時は、同志先生と話をしたり、家主さんの話を聞いたりしてリラクセスして過ごせました。活動自体も力仕事あり、考えながらする仕事ありで、自分に合っており、また、仲間と和気あいあいと進めることで、自分の力を生かすことができました。作業が終了した時は、汗もたくさんかいていたのですが、疲れを感じるよりも充実感を強く感じました。これまでの二回よりもはるかに強い充実感でした。これはどこから来ているのだろうと考えた時、やはり、同じ志を持った者と活動しているからであろうと思います。仲間なので心を開いて活動ができるので、自分の力を発揮でき、充実感を感じたのだと思います。

ます。と、同時にこれからも熊本支援を続けていこうと思いました。

【益城町の現状を目の当たりにして】

埜口先生に案内していただき、益城町の震源付近の惨状を見ることができました。倒壊した家屋がまだ手つかずのまま残っていました。これでもだいぶ整理された方だということ聞いて、言葉も出ませんでした。被災した私の友達が益城町の様子などを見ると今でも涙が出ると言っていたことを思い出し、そのわけを理解できました。共感することができました。写真やニュース映像でたくさん見てきたはずの光景なのですが、間接的に見ると、実際に見るとでは、全く心に響くものが違いました。私の心に何か訴えてきました。何かしなければいけない、このままではいけないという強い思いが湧いてきました。この思いを持ったまま車を運転して長崎に帰った私は、帰り道運転しながら何ができるか考えながら帰りました。そして翌日、長崎平和の日で全校登校日、全職員が出勤しているということも何かの縁、職員会議の前に益城町のことを話して画像も紹介しました。最近、熊本地震が取り上げられることが極端に減ってきているが、まだまだ支援が必要なことを伝えました。最後にボランティアバスのことも紹介しました。少しずつでも熊本復興支援に目を向けていって、活動できたらなあと思います。

ます。と同時に、私自身も自分ができることを考え、少しずつでも実践していかなければと強く思います。

おかげさまで、今回もとても密度の濃い、一日を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

余談になりますが、今、このレポートを作成しているのですが、このあと数時間後に熊本に四回目の支援活動に行ってきます。今度は阿蘇市に行くこととなります。同じ九州、自分ができることのできる時に少しずつやっていこうと思います。ありがとうございました。

★福岡県 五十代 男性★

私は、福岡県内に住んでおりますので、八日に合流させていただきました。高速道路の渋滞を回避しようと降りて進むと予想外に時間がかかり、現地到着が大幅に遅れてご迷惑をおかけしました。

四月・五月に益城町の総合体育館周辺は行かせていただいていたいました。そこでは、ひどい家屋の倒壊が見られましたが、作業をさせていただく地区は、家は立っています。壁や柱に横線を引くように亀裂が入ったり、斜めに傾いたりして、家には全く住めないようでありました。それに加え

て、たびたび来る余震で倒壊の危険があり、倒壊したら隣の家まで巻き込んでしまうような状況です。地震の恐ろしさが再びこみ上げてきました。被災された方々は、瓦礫等の廃棄物を燃える物、ガラス、金属、木材などと仕分けして、トラックに積み込み、被災証明書等を添えて申請書を準備して集積所に持ち込むなど、細やかな手続きが必要なようでした。皆さん真摯にそのようなことを守られ、復興に向かって進んでおられるのであると頭が下がる思いでありました。

支援活動に入らせていただいたお宅には農業に関する道具が多くありましたが、廃棄する物・しない物という仕分けも必要です。家族以外の、それもハウス農業の詳しいことなどよく分からない私のような者が入ると、何に使うのか、再び使えるものなのか、高価な道具なのかなど、何も分かりません。よその者が勝手に自宅の物を扱うことについての無礼も考えたことでした。

当日は、たいへん天気がよく、炎天下での作業でした。作業をされてある教師塾の皆様は、皆様年齢に関係なくタフでいらっしやって、次々と作業が進んでいきました。二日間じっくり学ばれて、この作業のタフさを見ますと、これも積み上げてこられたのだなあと感じ入りました。私は体が動かなくなったりとか、頭が痛くなったりとか、そういうことはありませんでしたが、人様のお役に立て

る体力をつけることは必要なことだと参加させていたで改めて感じました。被災地のこと、作業のこと、ボランティアの規定のことなど、貴重な学びの機会をいただきました。参加させていただいたことをとてもありがたく感じております。また、鍵山先生からのお弁当、埜口先生からのいきなり団子、正春さんから飲み物をいただき、本当に力が湧きました。ありがとうございました。私は遅れてきた分、皆様とお別れして午後も少しだけ作業をさせていただきました。帰るときには、作業をさせていただいたお宅の方が、深々とお辞儀をされて見送っていただきました。また、作業中には、飲み物や冷たい物などもいただいていた。被災されてたいへんなお気持ちでいらっしやる上に、どこの誰か分からない者に対して、ただ作業をしたということだけで、美しいお心を見させていただきました。恐縮いたしますとともに、心より感謝申し上げます。

★大阪府 二十代 男性★

「やばい！最高や」熱い熱い温泉に浸かりながら皆が口にしました。身体を洗えば水は真つ黒に。さっぱりしたら後は大阪に帰るだけ。実は初めて上陸した九州。初めての九州が観光ではなくこんな形になるなんて・・・熊本は想像を遥かに超

える光景が広がっていました。熊本県益城町。目に飛び込んでくるのは一階部分が押し潰された家、ブルーシートをかけた家、瓦礫となった家。日常の生活とはかけ離れた景色でした。

二〇一六年四月一六日に熊本、大分で相次いだ地震は一瞬にして「日常」や「当たり前」を奪いました。私は被害の大きさを報道でしか見ていませんでした。夜に発生した地震は現状がつかめぬまま朝を迎え、次第に被害の大きさが明らかになっていきました。メディアが大きく取り上げるとそれだけ私も危機感を募らせ、熊本の悲惨さを知ったつもりでいました。熊本の為になにか！とも思いました。しかし、報道が徐々に少なくなっていくと同じ様に私の中でも大きなニュースとはなりません。そうやって震災から四ヶ月が経ち、ようやく益城町を訪れることができました。目の前に広がる光景は、分かりきったつもりでいた私にとって衝撃でしかありませんでした。甘かった。所詮他人事でしかなかった。行動をすぐに起こせなかった自分に後悔しました。

復興作業はある農家の方の納屋と家から荷物を取り出す作業で、長い間納屋にしまわれていた物は多くの土ボコリを被っており、体はホコリだらけ。作業は困難でなかなかスムーズには行きませんでした。しかし、熊本の為にと想いを寄せる沢山の先生方と少しずつ少しずつ確実に進めて

いき、予定時間には作業がほとんど終わってしました。少しずつでも進めることがきつと復興への道なんだと勝手ながらに思いました。

作業中に依頼主の方と何度かお話を伺う場面がありました。生々しいやり切れないお話の数々に言葉を失うばかりでした。高齢になられて、借金を今から数千万円単位で背負う非現実的な過酷さは想像を遥かに上回るものがあります。それだけシビアな状況にも関わらず依頼主の方は私たちに冷たいお茶や、アイスなど差し入れをしてくださいます。その善意はとても嬉しいと思う反面、厳しい状況下で気を遣わせているのではないか？という心苦しきにもなりました。

益城町でも被害の大きな体育館周辺を埜口先生に案内していただきました。そこは地震で崩れた家、押し潰された家ばかりでした。玄関に貼ってある紙は全て全壊通知の赤紙。四ヶ月経っても解体されたものはわずか。益城町は震災から時間が止まっているようでした。自分の家が次見たときに押し潰されていたら。潰れた家は自分の帰りを待っていないかったら。目の前に広がるのは無念と自然の脅威でした。ただただ言葉を失いました。避難所の体育館のお話を埜口先生に伺いました。「避難されている方はもう八〇〇人を切りました」ピークに比べれば確かにもう八〇〇人はいません。しかし、時間が経ってもう八〇〇人弱の方

が不自由な生活をされています。ここではないいつもの感覚ではいたらいけない。そう自分の心が言っていました。

熊本はあの日から時間が止まっています。未だに苦しい事ばかりでずし、これから更に苦しくなるでしょう。自己満足に近いかもしれないですが、今回自分が少しでも力になれたなら嬉しく思います。僕は「頑張ろう熊本」と最後まで思っています。僕は「頑張ろう熊本」と最後まで思っています。僕が、振り返ると被災された方々は皆さんもお頑張っています。それどころか私たちに力と元氣までくれました。熊本は今「頑張ってるで熊本」です。そして、「日本の皆も頑張れ！」と言っています。最大の支援は一生懸命に生きることと言いますが、「今一生懸命生きる」これを私も含めてやっついていかないといけない。そう感じました。さあ、今を一生懸命に生きよう！

★★沖繩県 五十代 男性★★

【熊本地震復興支援活動に参加して】

実際に現場に行ってみないと伝わらないものがあるはず、でも伝わっても何ができるかわからない、何か手伝いたいけど、動けない・・・。そうこうしているうちに時間は過ぎていく。あまりにも自分の想像力を超えた状況で一般的な枠を超えきれない自分がいるその中で大谷先生から

メールが届きました。

刻々と伝わってくる被災地の様子、変わっていく支援物資、それに全力で対応する教師塾を中心とする支援チーム。息をのみながらメールを読み続けた。「準備のない緊急結成のチームで、限られた時間の打ち合わせでここまで連携を取りながら動くことができるのか・・・。」

そして届いた浅野さんの言葉「頑張る人は震災の前から頑張っていた人」。

今回午前中のみでしたが支援活動に参加させて頂きました。大変な状況にも関わらず、自らずつと作業に参加されながら笑顔で指示していただいた家主さん、ご家族。山口から移動して、炎天下での作業に全力で取り組んだ教師塾の皆さん。自ら被災されながら被災地の状況を案内して頂いた埜口先生ご家族。移動の車の中、作業の後にも関わらず具体的に避難所の様子をお話しして頂いた浅野さん。

今はまだ気持ちも言葉も整理できずにいます。ができる時に、できる人が、できる事を「この言葉を使命と受け止め、活動報告を生徒向けに編集し、何を教訓とするか考えていきたいと思います。参加させていただき心から感謝します。ありがとうございます。」

★大阪府 五十代 男性★
《熊本復興支援活動を通して》

今回の鍵山教師塾後に熊本県に足を運ぶことができない私は、前日の五日に熊本に入り復興支援活動を行ってから山口の鍵山教師塾会場に入らせていただきました。熊本地震から三か月以上が経った時期ではありましたが、現実はまだまだ復興には時間がかかり、私が現地に入った時の活動は、被災した老夫婦のご自宅から必要な荷物を運び出し、それを仮設住宅に移動させるという引っ越しの活動でした。被災した自宅には様々な思いの品があり、すべてを持ち運ぶことができない中、限られたスペースの仮設住宅に移動させるにも限界があります。運び出せることができる物と逆に運びだす事ができない物もたくさんあり、非常に辛そうにされているのが印象的でした。少しでも願いを叶えたいという思いだけで動いている自分がいましたし、仮設住宅に入ってからがまた大変な状況が始まるのだと活動を通して、またこの老夫婦とお話をする中で感じました。私が伺った八月初旬は非常に暑い日が続いており、仮設住宅の三部屋の中にはエアコンがひとつしか設置されておらず、日々の生活の中でも仮設住宅には入居できたとしましても、この先のご苦労が絶えないことを考えると心が痛む思いになりました。何よりも、先々の見通しもつかない中で

不安な生活が続くと思うと安易に言葉を掛けることもできませんでした。それでも活動を終えて帰る際には、玄関先にまで出て来ていただき、深々と頭を下げていただく姿に涙が出ました。何もできない自分の微力さを感じながら、少しでも役に立てることがある限り復興支援活動は続けていかねればいけないと心に誓い、現地を後にしました。

★兵庫県 五十代 男性★

四月二十三日以来の熊本でした。埜口先生のご案内で益城町を歩かせていただきました。地震発生からなんら変わりが無いように感じました。倒壊した家屋、街並みを眺めていると阪神淡路大震災の景色と同じで胸が締めつけられる想いになりました。私でさえ、当時にフラッシュバックしました。

今回、石巻から浅野さんが参加して下さいました。東日本大震災を乗り越えられた浅野さんが来られたことは、直接的にも間接的にも大きな、大きな意味があったと感じました。しかしながら、被災地で活動するということは、浅野さんご本人は口には出されませんが、相当な覚悟と強さが必要であると拝察いたします。

今回、お手伝いをさせていただきました家屋が

全壊された方も、目には見えない、口には出されない苦しみや悲しみと向き合われておられます。東北もそうであるように、今、何が最も必要であるかを考え、平和ボケすることなく、心を寄せ続けて参ります。

この度も、復興支援活動と言いながら、多大なご支援をいただきました。そして人として大切なものに気づかせ、学ばせていただきましたこと心より感謝申し上げます。

★大阪府 二十代 男性★

六・七日に山口の朴の森で開催されていた鍵山教師塾から十九名でレンタカーを乗りあわせて行かせていただき、熊本市内で一泊後、翌朝七時半に益城町ボランティアセンターに行き、復興支援活動をさせていただきました。

当初は四〜五人一グループでの活動になると思っておりましたが、二十二名（現地参加三名）での活動を割り当てていただき、何度も経験されているベテランの方二名と一緒に活動させていただきました。

被災地、特に益城町は地震起こって四ヶ月近くなりますが、ほとんどはその当時のままの場所が多くありました。二階建ての家の一階部分が潰れてしまっていたり、瓦が落ちてしまい屋根にブル

ーシートが張られている家があり、私の住む大阪とは全く違う景色・空気が流れていて、自分自身、生かされているのだと感じました。しかし、日常が恵まれすぎている自分は、感謝という言葉が頭では考えるものの、実際の行動、実践とは程遠いのが現実です。今回の復興支援活動に参加させていただけただけで、改めて平和ぼけしている自分と向き合うことができ、次への一歩が踏み出せるように感じます。

活動をさせていただいた場所は、農家の納屋との方が住まれていたお家でした。お家は畳やすまなどを出し、細かい破片などを掃き出しました。納屋は傾いていて、農作業道具などを出していき、分別を行いました。活動は力仕事、分別などの細かい仕事があり、役割分担はせずとも皆が自分にできることを考えながら取り組んでいたおかげで、滞りなく取り組めました。

今回の活動では、依頼主の農家の方（ご家族）も一緒に活動させていただけました。活動中少しお話させていただく機会があり、住む家はなくなっているのに、これでも自分たちはまだ恵まれている方とおっしゃられていたことがとても印象に残っています。

今回の活動では、多くのことを感じさせていただきましたが、その中でも強く感じていることは、次の一歩に向けてのエネルギーの違いです。

多くのものを無くして、いや全てをなくしながらも、次はどうしようか、どのように生きていこうかと次の一歩を踏み出している被災された方々とお会いし、活動させていただくと、並大抵なエネルギーではないのだと思います。

そして、今回一緒に活動させていただいた時間は、思いの方向が皆ひとつの方向で、それもまたすごいエネルギーだったのでないかと感じます。自分の日常はどうか、普段の仕事が忙しい、思い通りにならない、自分だけ、自分を止める行動、言動ばかりなのだと思えます。

しかし、今回実際に現地に行き、活動させていただくことで、心を前に向け、前進あるのみなのだと感じました。

場所は違えども、思いはひとつ、心はひとつ、ありがとうございます。